

シリーズ「翻訳を考える」第一回〜第四回

二〇一五年度にはじめて「翻訳」について考える企画を、一歩進めて、実際刊行されて間もない翻訳書の訳者（たち）を囲んで、原作の意味、訳書刊行の意義、さらには翻訳の現場で生起するじつにさまざまな事件と言ってもよいであろう出来事を、公開の場で存分に語り合ってもらおうことをとおして、できれば聴衆自身のなかに、「翻訳」という行為にたいするあらたな関心や見方が生まれることを期待して、二〇一六年度は連続講座という体裁を採りつつ、多彩なゲストをお招きして都合五回にわたって実施することができた。以下に、ゲストをはじめ講師の方々を、ふかい感謝をこめて記す。

- ① 4月26日 J・G・バスケスを芥川賞作家と読む：
小野正嗣（作家）、柳原孝敦（ラテンアメリカ文学）、久野量一（ラテンアメリカ文学）
- ② 6月17日『プラハの墓地』を読む エーコと大衆小説：
橋本勝雄（イタリア文学）、小倉孝誠（フランス文学）、和田忠彦
- ③ 10月10日 手をつなぎ合う文学 「多」としての言語と翻訳：
関口涼子（詩人・翻訳家）、温又柔（作家）、金子奈美（バスク文学）



- ④ 11月9日 戯曲『オルフェウ…』と映画『黒いオルフェ』を読む ボサノヴァの誕生とフランスからのまなざし：
福嶋伸洋（ブラジル文学）、小沼純一（音楽・文芸評論家）、桑田光平（表象文化論）

報告 和田忠彦